

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

発生予察情報について（送付）

病害虫発生予察特殊報（第 1 号）を下記のとおり発表したので送付いたします。

平成 26 年度 病害虫発生予察特殊報（第 1 号）平成 26 年 5 月 2 日
愛 媛 県病害虫名 キウイフルーツかいよう病 (*Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae*)

作物 キウイフルーツ

特殊報の内容 愛媛県（国内）における「Psa3 系統」の初確認

- 1 発生地域 東予地域
- 2 発生経過

平成 26 年 4 月、西条市、今治市のキウイフルーツ採集葉を農林水産研究所果樹研究センターで PCR 検定したところ、キウイフルーツかいよう病であることが確認された。6 園地（計 94a）で確認され、発病樹が 20 本を越える園地もみられている。今回、果樹研究センターで遺伝子解析を行ったところ、病原細菌は国内で発生報告がない「Psa3 系統」であることが判明した。また、従来、愛媛県及び他県で確認されている病原細菌は「Psa1 系統」とされている。当地域での発生はレインボーレッド、ホート 16A で、ヘイワードの発生は現時点では確認していない。

- 3 他県での発生状況等

本病は国内で広く発生しているが「Psa3 系統」の発生は全国的にも確認されていない。

- 4 病徴と被害

1) 「Psa3 系統」は、海外では強い病原力を有し被害を拡大させている事例がある。ただし、県内における発生については、今後の試験研究により明らかにする課題もある。

2) 本病は、枝幹、新梢、葉、花蕾、花に発生する。果実では発病しない。なお、中国系品種では樹幹等を枯死させるなど、著しい収量低下の原因となる。

3) 葉では従来、径 2～3 mm の不整形の褐色斑点で周囲に明瞭な黄色のかさ（ハロー）を伴った病斑を形成していたが、今回、発生園地では 4 月中・下旬にハローが不明瞭で褐点を生じる発病葉が確認されている（写真 1）。特にこの発病葉の発生を見逃さない。発病の最盛期は 4～5 月で、梅雨明け後には病勢は衰えてくる（ただし、病原細菌は死滅しない）。

4) 罹病枝は 2 月中旬以降、枝の亀裂や切り口から粘質の細菌液を浸出し（写真 2）、その後細菌液は暗赤色に変色する。罹病枝は発芽しないか、発芽しても 4～5 月頃に萎ちよう枯死する。枯死枝の発生は夏頃まで続く。

5) 伸長中の新梢は、感染すると水浸状～黒色になり亀裂を生じて萎ちよう枯死する（写真 3）。

6) 蕾では、がくが褐変し（写真 4）、著しい場合は落下する。花は花弁が褐色になって開かないか、開いても不完全な形に開く。

- 5 発生生態

1) 本病は雨媒伝染および器具伝染する。

2) 第 1 次伝染源は枝幹から浸出した細菌液で、幼葉には気孔、水孔、傷口から感染し、梅雨までは、新しい葉に 2 次伝染を繰り返す。

3) 強い風雨は、発病を著しく助長させる。

4) 秋期から冬期にかけて、発病葉から溢出した病原細菌が、枝の傷口等に感染して発病させる。また、発病しなくても傷部に潜在感染し、4 月以降の葉の伝染源になる。

6 防除対策

1) 耕種的防除

- ① 発病樹は早期に伐採し発生源を絶つ。伐採は発生園地全体を基本とする。伐採した残さは適正に処分する。
- ② 発病樹の伐採に用いた器具は必ず消毒する。
- ③ 風当たりの強い園地では防風対策を行う。
- ④ せん定後は必ず、傷口に癒合促進剤を塗布する。
- ⑤ ヘイワードの場合、3～5月まで雨除け栽培を行うと発病が少なくなる。

2) 薬剤防除

- ① 収穫後から発芽前までの休眠期に、カスミンボルドーの500倍、銅シン水剤500倍、またはICボルドー66Dの50倍を定期的(約1か月間隔)に散布する。特に発生園周辺の園地においては定期的な薬剤散布に努める。
- ② 発芽後叢生期(新梢長約10cm)までにカスミンボルドーの1,000倍または銅シン水剤1,000倍を散布する。
- ③ カスミンボルドー、銅シン水剤、またはコサイド3000を散布する場合には、薬害軽減のため炭酸カルシウム剤200倍を加用する。
- ④ 開花前までにコサイド3000の2,000倍を散布する。
- ⑤ 4月下旬以降はアグリマイシン-100の1,000倍、アグレプト水和剤の1,000倍またはカスミン液剤の400倍などを散布する。



写真1 葉の病徴(明瞭なハローを生じない)



写真2 枝(切り口等)からの細菌液の漏出



写真3 葉、枝の枯れ込み



写真4 蕾の病徴